

11月のことば

～考える④ 学び～「気づき」その②

日本を思う^{しゅうしつ}秋^{あき}日。その良さは匠^{たくみ}の国。技術の国。文化の国。いずれの仕事も任せても「サービス良好、製品は安心」ということが、日本の信用と強さにつながる。それを支えているのが人。人を作るのが教育。その教育で大切なのは、本人の学ぶ意欲。学ぶ意欲は気づきから始まる。知らぬことを発見する（知る）喜びを知っているか否か？それは、日々の事象・物事に「気づき」があるかないかで決まる。

ここに「先練り^{きまぐり}機転^{きてん}」という言葉がある。これは^{はなしか}斲家の内弟子となり、師匠と暮らす中で気づきがあるかないかで将来が決まるというものである。

例えば、師匠から「うちではええけど、よそでやったらあかんでえ。」と言われるとそれは「うちでもやったらあかんでえ」と言われている事に気づく。等、一々マニュアル等では書けないものがある。

世はマニュアル化時代でやたら書面が多くなるも、真の仕事や職務の価値は「いかに気づきがあり、学ぶ気が充満しているか。」で決まる。

その「気づき」ある人をつくるにはどうすればいいのか？それは以下の三点であると思われる。

1. 身辺の掃除・整理・整頓と動植物の世話をする。

自らの身辺の有り^{あり}様^{よう}に気づく。又、人が散らかしたものと公の場の掃除をすることで、人がどうすれば気持ちよく喜んでいられるかに気づく。

物言わぬ動植物は気づきなくば死に、気づきあれば美しく輝く。次第に天の^{り(ことわり)}理に気づく様になる。
2. 一つの事項（学び）を手間暇かけて行なう。

遊びや実験は失敗を繰り返し、次々と発見し、上手くいく喜びを体感させる。一つの行事、事柄も様々な下準備や片付けをする人がいてこそ、^{じょうじゆ}成就している事に気づき、感謝の心を表すことが真の喜びであると分らせる。
3. 他人の事を思う心を養う。

他人を喜ばせて自分が嬉しくなるのは人間のみ。

世の為、人の為にする行動が、自分に幸を与えてくれるという実感より、家族のこと、職場のこと、社会のことに幅広い気づきのできる人となる。

それは、教えられるものではなく、日常の^{まじまじ}些細な出来事や真の大人の言葉かけから“気づいて”学ぶ。